朝日新聞

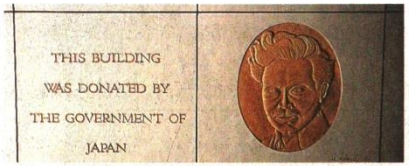
2022年（令和4年）
10月26日
水曜日 夕刊

グラフ 4
NEWS＋α 5
円・株 4
社会・総合 6
社会 7
TV・ラジオ 5.8

朝日新聞東京本社
〒104-8011 東京都中央区築地 5-3-2
電話 03-3545-0131 www.asahi.com

感染症と闘う NOGUCHI

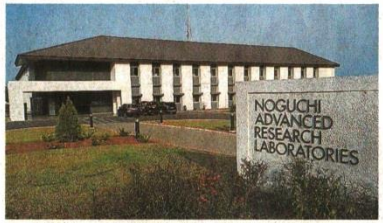
いまも ガーナで



ガーナ大学野口記念医学研究所の玄関には、野口英世の顔が彫られたパネルがはめ込まれている

野口英世

1876年、福島県の農家に生まれた。幼い頃に左手をやけどしたが、その後手術を受けたことを機に医学の道を志した。上京して医師となり、渡米してロックフェラー医学研究所に入った。細菌学者としての地位を確立した後に渡ったガーナで亡くなった。首都アクラにあるコレブ病院には、かつて黄熱病の研究にあたった施設を改装した記念館や「野口英世博士記念日本庭園」が設けられている。



上下ガーナ大学野口記念医学研究所の先端感染症研究センター＝3月、遠藤雄司撮影

日本から約1万3千キロ離れた西アフリカのガーナに、現在の日本の1千円札の顔、野口英世の名を冠した医学研究所がある。世界に感染が拡大した新型コロナウイルスに襲われたのはガーナも例外ではない。日本の偉人の名を掲げた研究所は、コロナ禍でピーク時にPCR検査の8割を担うなど、同国の感染症対策を支えた。

まっさらな白いタイルに白い棚、人の顔が映るほどきれいに磨かれた黒い机が並ぶ部屋には、新型コロナウイルスの検査キットや超低温にも対応できる冷凍庫などの機器が並んでいた。

首都アクラにある国立ガーナ大学健康科学部に付属する野口記念医学研究所は、1979年に日本政府の途上国援助（ODA）の一環として無償資金協力で設立された。感染症の研究機関としての役割が期待された。入り口には、野口の顔が彫られたパネルが埋め込まれており、「黄熱病から人類を救うための解決策を調査していた名高い日本の医学者」などとたたえられている。

黄熱病調査に渡った地 その名を冠した研究所

細菌学者だった野口は1927年、黄熱病の研究のため、当時は英国の植民地だったガーナへ渡った。しかし翌28年、自身の研究対象だったその黄熱病にかかって亡くなった。こうした野口とガーナの深い関係性から、研究所はその名を与えられることになった。

そして、研究所の新施設として日本の無償資金協力によって2019年にオープンしたのが、先端感染症研究センターだ。感染力や危険度の高い病原体にも対応できる「バイオセーフティーレベル3（BSL3）」の実験室も備えたことで、より高度な研究を安全に行えるようになった。

コロナ禍 国内のPCR検査の8割担う／周辺国にも貢献

この研究所と最新鋭の設備を備えたセンターが、ガーナや周辺国で一躍名を上げることになるきっかけが、2020年に始まったコロナ禍だった。

新型コロナの流行が世界に飛び火し始めた時、ガーナ国内で新型コロナウイルスを検出する能力がある場所はごく限られていた。そのような状況で同年3月、ガーナで新型コロナの最初の感染例を確認したのが同センターだった。ドロシー・イエボアマヌ所長は「センターができたのはコロナ禍直前の、本当に良いタイミングだった」と強調する。

その後も、研究所はガーナのPCR検査を牽引した。ピーク時には、国内の検査の8割を担った。それだけの検査を扱うため、本来は担当の異なる細菌や寄生虫、免疫学などを専門とする職員も投入して、24時間態勢で検査にあたった。

日本からの手厚い支援も迅速に行われた。マスクやPCR検査用の使い捨て白衣、検査キット、検査用試薬、検査の効率を上げる自動RNA抽出装置などの資機材を研究所に無償で提供した。

研究所がコロナ禍の中で果たした役割はガーナ一国にとどまらない。

周辺の国々では、PCR検査はできても遺伝子解析ができない国も多かった。このため、研究所はシエラレオネ、リベリアなど周辺国から送られてきたサンプルの解析にもあたり、ウイルスの株の特定を助けた。

「ノグチ」は、ガーナを超えて地域一帯のコロナ対策に貢献した。

国際協力機構（JICA）ガーナ事務所の現地職員は「ガーナで最も人気のあるラジオでも研究所の活躍については度々言及され、広く『ノグチ』が認知されることになった」と話す。イエボアマヌ所長も「野口博士がガーナで築き上げた礎の上に、日本とガーナ・野口研の協力が成り立っている。野口博士が情熱を注いだ感染症分野において、『ノグチ』の名を冠した研究所がガーナや西アフリカ域内のパンデミック対応に貢献できたことを光栄に思う」と語った。

アフリカ疾病対策センター（CDC）によると、今年5月以降、アフリカ全体での新型コロナの感染者数は急激に減り、多くのアフリカ諸国が徐々にコロナ前の生活へと戻りつつある。

だが、コロナ禍を克服できたとしても、アフリカではマラリア、エイズ、エボラ出血熱など様々な感染症との闘いが続いていく。多くの人命をアフリカで奪い続ける感染症の封じ込めに向けた研究が、野口記念医学研究所に期待されている。

（アクラ＝遠藤雄司）